

「ごちゃまぜ」 あらゆる障害のない社会へ

GOCHAMAZE
times2021
AUTUMN

vol. 16

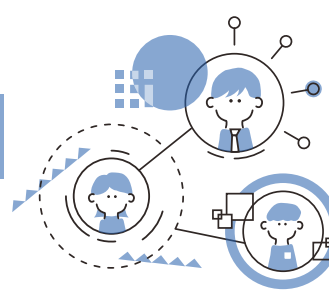
TAKE FREE

福祉はだれのもの？



ソーシャルスクエアってこんなところ！

1 社会とツナガル



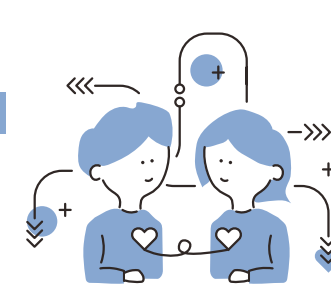
SOCIALSQUARE は英語で「社会とつながる広場」という意味。社会との接点をつくりたい方には居場所として、関わりを少しずつ増やしていきたい方には地域社会との交流の場として、あなたの一歩を応援します。

2 学びにツナガル



ずっと興味があった資格取得を目指すもよし、SOCIALSQUARE の提供するプログラムに参加するもよし。覚えてきたことや感じたことを他者に共有できる環境があるからこそ、これまでできなかった気づきや学びがあります。

3 心がツナガル



同じ場所・同じ時間を過ごしたり、自分の困りごとを話したり。少しずつお互いのことを知り合う中で、きっとあなたにとって心地よい関係性が生まれるはず。なんでも相談できる場所へ。

SOCIALSQUARE
メンバー募集中！

講師や寄付も募集しています！

詳しくは上記QRコードより
WEB をご参照ください！！

いわき店

福島県いわき市

就労移行支援・就労定着支援・
自立訓練（生活訓練）

DATE

住所：福島県いわき市内郷内町水之
出17 ソーシャルスクエアビル 1F
Tel: 080-3525-9426
Mail: ss_iwaki@sdws.jp

いわきスポーツ店

福島県いわき市

就労移行支援・
自立訓練（生活訓練）

DATE

住所：福島県いわき市平上荒川字桜
町1-1 あらたな内
Tel: 070-3349-6785
Mail: ss_sports_iwaki@sdws.jp

西宮店

兵庫県西宮市

就労移行支援・就労定着支援・
自立訓練（生活訓練）

DATE

住所：兵庫県西宮市中前田町1-27
ラビットビル 1F・3F
Tel: 090-8377-4839
Mail: ss_nishinomiya@sdws.jp

熊本店

熊本県熊本市

就労移行支援・
自立訓練（生活訓練）・
相談支援（計画相談）

DATE

住所：熊本県熊本市中央区水前寺公
園3-4 土山祐堂ビル 2F
Tel: 070-7587-9202
Mail: ss_kumamoto@sdws.jp

福祉とは、人が幸せに生きること、そのものだ。支援も、サービスも、場所も、本来は、いまを生きるすべての人に開かれている。そう、福祉は、限られた人のためにあるわけじゃない。

でもどうだろう。

だれもが弱り、だれもが困難を抱えずにいられない現代。もっと大変な人もいるから。

人に迷惑をかけてはいけないと、支援やサービスを受けることをためらったり、だれに世話にもなっちゃいけないと、自分を追い詰めてしまっている人も多いはずだ。

だからいま一度、問い直したい。

福祉とはだれのものか、を。

そしていま一度、考えたい。

福祉が「みんなのもの」にならない、その背景を。

特集

福祉はだれのもの？

なぜ福祉がうまく活用されていないのか。福祉がみんなのものにならないのか。

障害福祉の事業を中心やってきた私たちは今回、福祉が持っている「トクベツ感」に焦点を当ててみました。それは決してスペシャルという意味ではなくて、どちらかというとネガティブなイメージでみなさんの心の中にあるのではないのでしょうか。福祉とは本来、「しあわせ」や「ゆたかさ」を意味する言葉で実はとても普遍なもの。ここでは福祉がいまひとつ「みんなのもの」として活用できない背景を、3つの要素から紐解いていきたいと思います。



「活用できる福祉サービスや制度はあるはずなのに、支援に結びついていない」など、サポートが必要な方に情報が届いていないケースがあります。

実際、私達が運営するSOCIAL SQUARE(障害福祉サービス事業所)でも、「何年も引きこもり状態だが、福祉サービスの利用はしてなかった」「どこに相談していいかわからない」といった方と出会うことも少なくありません。また、地域の方に向けて個別相談会を開催した際も、「こんなサービスがあったんですね!」といった反応を頂いたことがありました。情報がいき届いていない状況は、福祉サービス全体の話だけではなく、私達としても実感しています。

ではなぜサービスを必要としている方々へ情報を届けられていないのか考えてみました。一つは、我々福祉を提供する側からの情報発信が足りていないという事です。そもそも、福祉施設で働く支援員さんは、目の前の利用者さんのサポートをするプロであり、情報発信のプロではありません。どのように、何のツールで情報発信していくことが有効なのか、

支援員が不足がちで時間の確保が難しい福祉現場において、普段の支援業務にプラスして情報発信を行う余裕はないのかもしれない。

次に、支援員さんの努力でインターネットやSNSでの情報発信ができたとしても、病気や障害、年齢が理由でご自身で情報を集めることが難しい方もいます。自治体のWebサイトにも福祉サービスや相談窓口が掲載されていますが、そこまで辿りつくことができない方もいらっしゃると思います。そのような方々には、福祉サービスや制度に詳しい支援員や市の職員さんが実際にお会いして、お伝えすることが有効なのかもしれません。

しかし、福祉サービスの利用に繋がる方は、既に利用している支援機関からの紹介や、市の相談窓口から紹介を受けて繋がるケースが殆どで、相談窓口に行けないような状態の方へのアプローチが少ないうちに思われます。また、支援員が自宅訪問など営業活動のようなことをやろうと思っても、福祉サービスに魅力を感じてもらえるような営業スキルが求められてくるでしょう。普段の支援業務の他に情報発信や営業スキル、支援員1人で行える仕事量ではないのかもしれない。



また、支援が受けられることはわかっていても、頼らないという選択をしてしまっている事もあります。SOCIAL SQUAREの支援員の周りで、実際にあった事例をご紹介します。

ある支援員さんのお母様は72歳になるのですが、股関節の調子が悪くなり、今年の3月に人工股関節の手術を行ったそうです。手術前は自分で歩くことも困難で、家族で協力しながら介護をしましたが、なかなか大変で、その支援員さんは、正直これが毎日続いたら仕事

なんかしていられないなと感じてしまったそうです。手術は無事に成功し、何とか杖を使えば歩ける程度には回復しました。

その支援員さんは、入院中から主治医の先生にも相談して介護保険が使えるように手続きをしていました。ですが、当のお母様はあまり介護保険を使うことに乗り気ではありません。理由を尋ねると、介護を受けること、デイサービスなどに対して、ネガティブなイメージを持ってしまっていました。「デイサービスって老人が通って折り紙とかしてるようなところでしょ?私にはあいう所には行きたくない」というような事を言っていたそうです。その支援員さんとしては、リハビリをしなければならなかったりまた歩けなくなるかもしれない、入院前のような状態に戻ることは絶対に避けなかったのだで、ケアマネジャーさんとも協力して何とか説得し、デイサービスに通うことにはなったそうです。実際に見学をしたりしてみれば、昔の介護施設のイメージとはだいぶ印象が変わっているはずなのですが、一度定着してしまっただイメージを塗り替えるというのは、なかなか難しいようです。

これは介護に限った話ではなく、福祉全般に言えることなのかなと感じました。福祉を利用するというのに、ネガティブなイメージを持ってしまっている、本来使えるはずのサービスが使えていなかったり、支援が行き届かないことで、状況が悪くなったりしている事例は沢山あるのではないかなと思います。どうすれば福祉に良いイメージを持って貰えるのか、これも大きな課題だと思います。



あるいは、福祉制度を知っているも、「すぐに周りに頼るなんて無責任じゃない?」と考えてしまう場合も。

最新記事はWEBのGOCHAMAZetimesで!



<https://gochamaze.jp>

今回の特集やインタビューの全文を公開中!過去のタブロイドのアーカイブはもちろん、ウェブ限定のインタビューや対談など、ここでしか読めない記事も豊富にあります。ぜひ一度ウェブ版もご覧になってみてください。

表紙デザイン | 江藤 菜穂子 (えとう なおこ)

SOCIALSQUARE 熊本店

ソーシャルコーディネーター/グラフィックデザイナー

デザインやアートを通して自由に表現している作品に触れ、それぞれの個性や多様性の面白さが周囲に伝わっていくことを実感。その後、障害福祉の世界に入りソーシャルデザインワークスへ入職。法人内ではデザイン業務も担当している。

WHO WE ARE



編集
TAIKAN FUJIKI



企画
RYOUHEI OMORI



広報 PR
KAORI WATANABE



Edit
Members



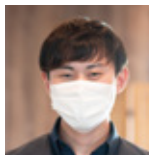
発行人
TSUYOSHI KITAYAMA



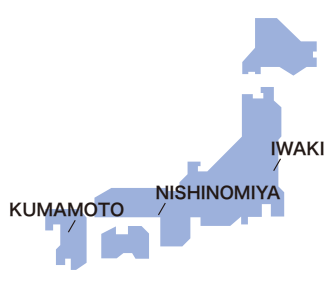
編集
RIKEN KOMATSU



デザイン
NAOKO ETOU



企画
MICHIFUMI OKUTA



NPO法人ソーシャルデザインワークス

私たちは「すべての仲間の幸せを追求すると共に諦めない社会を創る」を理念に掲げているNPO法人です。2019年現在、福島県いわき市、兵庫県西宮市、熊本県熊本市で障害福祉サービス事業所を展開しています。障害福祉サービス事業を軸とし、障害の有無や性別、国籍、年齢など一切関係なく、様々な属性の方々が自然に交流ができる機会を、ごちゃまぜイベントと題し企画運営しています。また、ごちゃまぜの発信・広報を行っています。



詳しくは web をご覧ください。

<https://sdws.jp>

ここでは3つのパターンの「頼れない理由」を見ました。情報伝達の課題、心理的な障壁、時代を映すような考え方など、いろいろ必要な要素が相まって今の福祉への「印象」を作り上げてしまっているのかもしれない。

特に「頼ってはいけない」「自己責任」という考え方は、知らず知らずのうちに私たちの心の中に染み込んでしまっているのではないのでしょうか?

ただ実際には、「頼らない」「自分で解決する」という選択をしたことで、あまり上手くいかなかったり、状況が更に悪化してしまう事もあります。

そこで次のページでは、「福祉」に頼り、取り入れるという方法を選んだことでさまざまな問題が「うまくいった」例を見ていきたいと思います。

その一つとして考えられるのが「自分は関係係だ」と主張したい人間本来的な弱さ。情報に溢れるこの社会、あらゆる困難や社会課題に向き合う時、そのひとつとつを自分ごととして受け入れるだけの余力を誰も持ち合わせてはいないのではないのでしょうか。

個人の許容量を超えてしまう。だからこそ「頼ってもいいんだよ」と手を差し伸べてくれるのが福祉なのではないのでしょうか。



森川すいめい 精神科医・路上生活者支援

久保田貴大 シェアハウス運営

加賀谷果歩 障害福祉支援員

それぞれの視点から見た福祉

司会 今日はお集まりいただきありがとうございます。今回の特集「福祉は特定の人のものではない」というテーマで編集部で議論を重ねた結果、いわゆる当事者と呼ばれる人だけでなく、その周囲の人たちの役割も重要なのではないかと仮説を立てることができました。今回は関わり方の立ち位置が異なる3名をお呼びし、当事者ではない周囲の人たちがどう関わっているのかを対談形式で深めたいと思います。まず、福祉の現場に携わっていない久保田さんの目には、「福祉」はどのように映っているのでしょうか？

久保田 普段はシェアハウスの運営に携わっているのですが、実は一昨年うつ病の診断を受けました。そこで初めて福祉的なものにふれることになったのですが、正直それ以前は福祉サービスを受けるということは「社会の敗者」を意味するんだと漠然と思っていました。今は違うのですが、自分と同じように福祉や精神医療に利用にくさを感じている人がいるんじゃないかなと。

加賀谷 「障害」そのものに對してもネガティブなイメージであるのかと思いましたが、小さい頃からの知的障害のある方とよく遊んでいたんですね。だから学校でも特別学級の子たちと一緒にいたんですけど、普段から仲良くしていた子たちに陰でひどいことを言われたり、遠ざかっていくのがわかりました。

森川 久保田さんの話でもあったように、福祉を受けたことによる差別的な扱いとか、当事者の尊厳が守られないような扱いが実際にあると思っています。

例えば私が関わっているホームレス状態にある方たちの場合、本当の意味での福祉ではなくて、ただ住む場所と食事を与えられるだけの、尊厳を踏み躪られるような支援も少なくありません。福祉を利用した後の幸せをイメージできないうちに、福祉を利用できない方たちともよく出会う気がしています。

加賀谷 福祉と繋がったけど、それがきっかけでまたネガティブな気持ちを抱いてしまおうというのはショックですね。

司会 そこで森川さんの取り組み「オープンダイアログ」という対話の場が、お互いの理解を深めながら、関わり合い方を探る。そういった役割を果たすのでしょうか？

森川 ありがとうございます。「オープンダイアログ」というのは1980年代にフィンランドのある地域で始まった活動なのですが、文字通り「開かれた対話の場」を意味しています。これまでの精神医療では、幻覚や妄想、抑うつ状態などといった精神症状をもつようになると、その「症状」が問題とみなされて診断名がついて治療が進められます。「オープンダイアログ」では、診断はいったん脇に置き、症状が出現するに至った経緯に関わる人たちと医療の専門職たちが集まって一緒に対話します。薬は症状を鎮静しますが困難な状況はそのままで。対話は相互の理解と困難そのものの解消を助けます。

司会 地域の人々の多くが対話の場に参加しているって、すごいですよね。どうやってかわりが増えていくのでしょうか？

森川 「オープンダイアログ」では困っていることについて話す際に、困っている方が話したいと思っている人たちを招待して、一緒に対話の場をつくらせているんです。

例えば学校に通えなくなった子がいるとしたら、本人をどうにかしようとしてしまうと思うのですが、親や学校の先生、友達と一緒に対話の場に

参加し、それぞれの言い分を聞き合っていくといった具合に。それまで知らなかったこともお互いの話を聞くことで理解できるようになるので、その場に参加した人たちにとって希望を感じられる場になるんです。

シェアすることの大事さ

久保田 オープンという話では、多くの運営するシェアハウスも基本はどなたでも受け入れるようにしています。ですが共同生活を断る以上は心苦しいけれど受け入れをお断りすることがあります。先日50代の方から問い合わせがあったのですが、様々な背景を抱えていてぼくひとりでは対処しきれないと感じたことがありました。それであれば別の場所とその人の居場所があるんじゃないかと考え、より福祉に近い選択を提案しました。偶然ぼくは知り合いに福祉関係者が多いので違う選択を示すことができたと思うんです。そうやって街中のカフェみたいないろんな人がふらっと訪れるような場所に、福祉サービスに誘導できるようにする人がいるだけでも、福祉の壁がちょっと低くなるのかもしれないですね。

加賀谷 なぜかわたし、学生の時から困っているおばあちゃんとの遭遇率が高くて、道を歩いていたら倒れているのを発見したりとか、車を運転していたら何かを訴えてくるおばあちゃんを見たから一緒に話をしたりとか。

司会 すごくおばあちゃんを発見するんですね。

加賀谷 なぜか目に入っちゃうんですよ、困っているおばあちゃん。でもそれくらい困っている方って日常的にいるんですよ。意識するきっかけが1つあるだけで気にかけるようになるし、その方がどんな困りごとを抱えていて、どんな人たちが関わっているのか全体像が見えてくると、なんだか助けられる気がしてきます。そんなきっかけをつくっていただけだと思います。

久保田 そうそう、シェアをする。自分



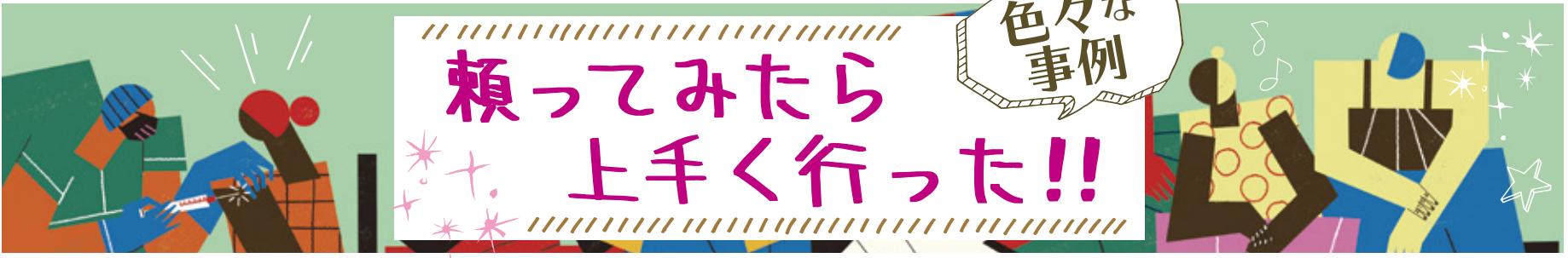
「福祉は特定の人のものではない」というテーマで議論してきた号。逆説的に、福祉が「当事者」に限定されたサービスであることに疑問を投げかけたが、議論を通して見えてきたのは、困っている人に関わる周囲の人々も含め、全員が福祉の「当事者」であるということ。

困っている人を前にした時、わたしたちはどうしても共感性を働かせて「助けなければ」と考え、その責任の重さに関わることを躊躇してしまったり、見て見ぬふりをしてしまつことも多いかもしれませんが、ですが支援者ではないあなただからこそ共感し、時間をかけて解決の道を探っていくことができる。

そのためにも、私たちは医療機関や福祉事業所ではなく、日常の中で、まちの中で、対等なひとりの人間として出会う必要があるのではないのでしょうか。『こちやまゼタイムズ』が目指すのも、分断された人々が繋がり、お互いが「当事者」として関わり合うきっかけがデザインされた社会なんだと思います。

オープンダイアログ 私たちはこうしている

森川さんが執筆された「オープンダイアログ 私たちはこうしている」が2021年9月6日発売となっています。



座談会 こちやまゼクルー

前のページでは「頼れない、頼らない」について掘り下げてみたことで、色んな原因が見えてきました。ここでは逆に「福祉」に頼る・組み合わせることでうまく行った具体的な事例を、こちやまゼ編集部の座談会形式でご紹介していきたいと思います。

奥田 福祉に頼って良かった！という声は、僕たちのメイン事業である障害福祉の支援の現場（※事例1）で言っていただけのことが多いなと感じています。今まで「自分一人でなんとかして生きてきたんです！」みたいな男性の利用者さんがいらしたんですけど、「サポートを受けて良かったです」って就職を決めて卒業されたんですね。その方が「クルー（支援員）の皆さんの存在が大きかったですけど、周りの他のメンバー（利用者）さんにも刺激をもらって、すごく自分が元氣になりました」と仰っていて、直接的な支援だけじゃなくて、その「場所」が持つ効果ってあるんだな、と。

渡辺 すぐく宣伝みたいだけど（笑）でも、そう評価してくださる方は多いよね。

奥田 その方は福祉サービスの利用も初めてで大丈夫かなあと思っていました。最終的には卒業後のサポートも「ぜひお願いします」みたいな感じで、その方の中で頼

ること」がフラットにできるようになったのかなって。

藤木 「頼る」っていうのがその人の選択肢のひとつになったのが良かったね。

大森 男性だと特にその選択肢を自分の中に持っている人、少ない感じがしますね。

藤木 世代もあるのかな。自分の母親も最近デイサービスに通い始めて、最初は「そんなことに頼らない」って言っていて聞かなかった。半ば無理やり通ってらって2ヶ月目なので頼って良かったかどうかは、乞うご期待っていう状況なんだよね。

大森 なんて頼れるようになったんですか？

藤木 身体機能が落ちてきて歩くのも難しい感じになりかけていたから、身内だから僕がちょっと強く言っちゃった。柔道整復師として動いていたので「リハビリをしない、やらないうで放置」するとうるなかつていうのが分かつちゃう。どうしても、自分の親だ！怒りを感じちゃう部分も正直あるんだよね。

奥田 正直、「早く福祉に頼って予防に努めてくれよ」的な？

藤木 そう。一日中座ってテレビを見ていれば「困っていない」かもしれないけど、いざ歩けない動けないってなったときには、もう遅い。「頼らない、頼る必要性がわからない」ってことはそんな怖さもあるよね。

大森 自治体レベルの話ですけど、兵庫県明石市は「こどもを核としたまちづくり」（※事例2）をすることで、誰もが生活しやすいまちづくりをしています。「福祉」との組み合わせを強化していくことで、人口増・税収増を達成しているみたいです。

藤木 市長の兄弟が障害のある方で、子供の頃から「家族や身内がなんとかしなきゃ」という考え方にずっと疑問があったってインタビュー記事を読みました。

奥田 最近、本を読んだんですが「インクルーシブデザイン」として、例えば障害のある人や子ども・高齢者などマイノリティ性のある人に意見を出してもらって、それに対する課題解決ができるまちづくりをしよう！という試みがあるみたいですね。

渡辺 なるほど。逆に頼っちゃおうみたいな。「困り事が価値になる」っていう仕組みは全然ありだよな。

大森 西宮店ってコンビニのすぐ近くにあって近所付き合い的なこともさせてもらっているんですけど、コンビニって本当に色んな人が来るじゃないですか。中には支援や福祉が必要そうな方とかもいらつしやるみたいで、時々店員さんからご相談いただくことがあったりするんですよね。すごく多様な人が集まる場所だから、もしかしたらそういう所と福祉がもっと近づいていくと良いのかなって思っています。

奥田 福祉、介護拠点を併設したコンビニ（※事例3）とかは展開があるみたいですね。

藤木 僕の知り合いの理学療法士が、最近駄菓子屋を始めたんですよ。駄菓子も販売しながら、成長期に大切な靴の選び方とか身体の使い方方とかも一緒に学べる場所を作ったりしてるんですよね。医療とか福祉の人が「特別なところにいる」んじゃないって、違う領域に出て「普通にその辺にいる」みたいな状況は結構価値になるんじゃないかと思っています。

奥田 そうですね。もつとと言うと「頼れる人が身近に居る」の次のステップとして、医療とか福祉の人のノウハウをみんなに発信して、一般の人も支援風のことができるようになる・しかるべき専門のところへ繋ぐ知識がある、みたいな状況ができると良いですよな。

ここでは個人のエピソードから、企業・地域・行政などいろいろなスケール感での「福祉」とのコラボレーション事例をご紹介します。こうして眺めてみると、一方向的に「頼る」という関係性というより、福祉と別ものの組み合わせで、より自由なかたちでの「課題解決」が目指せるんじゃないかと感じてきますね。困っている人の周りには「支援を要する専門家」だけじゃないんです。「誰かに迷惑をかけてはいけない」と同じくらい、「正しく助けなくては」と凝り固まってしまう気持ちがあるような気がしています。普段は、制度やサービス同士の干渉、行き届かなさばかりが目についてしましますが、本当は福祉そのものがもっと自由で、のびのびとしていて良いものだと思つてかされました。



まちをつくろう

大人も子どもも「ごちゃごちゃ」に

インタビュー「ごちゃまぜな人」第16回

田村 幸大さん

インタビュー中も次々とチャイムが鳴り訪れる地域の人々。その度に近所のお兄ちゃんのように「おっ、どうしたん」と応えるNPO法人なごみ代表の田村さん。

地域のために居場所の創設や教育のアップデートをしてきた田村さんに教育について聞くと「町全体を学校にしたいよね」と熱く語ってくれた。田村さんは今まで地域づくりをどのようにしてきたのか。これからどういった地域を目指していくのだろうか。



子どもの教育に興味があつて教師になりたいという気持ちもありましたが、学校というものに違和感を感じていました。教師を目指す人って子どもたちにこんなこと伝えたいとかこんなこと教えたいとか当然のように熱い思いを持っている人が多い。でも今の教育現場には、子どもと向き合う事と同じくらい他に時間を割かなきゃいけないことが多くあつて、言いたいことも言えない環境があります。それは仕方ない環境なんだけど、そういう学校の先生にこそ、自分の伝えたい事を子どもたちに直で伝えてほしいと思つています。学校自体はすぐには変わらないけど、まず学校の外「地域」を変え、社会教育を充実させていくことで教師や学校の負担を少し地域でシェアできるんじゃないかって考えたんです。

そこで2020年に西宮ではじまったのがコミュニティ・スクールです。簡単に言うと、学校がもっと地域に出ていこう、地域がもっと学校に入っていくというものです。子どもたちが、地域内で社会体験活動をいつでも出来るようになったり子どもと一緒になつて大人が教室で学んだり、今までなかなか出来なかったようなことがプログラムとして日常的に出来るようになった。できたらずいと思いませんか？また、学校に色々な目が入ることで変わってくることはたくさんあると思つています。地域の人が入ってくれば先生も住民と顔見知りになるし、ごちゃごちゃになつていくんですよ。そうやって学校の先生だけじゃなくて地域全体で子どもたちを見守っている環境を

作っていったらいいなと思ひます。それが町全体を学校にするということ。

活動する場に鳴尾東という地域を選択しました。元々昔は鳴尾ついでいう大きな村があつて、そのためか結束力はすごく強いんです。その反面、外部の人が入っていくには時間がかかる事が多いのですが、受け入れてもらう事ができたなら、この地域に可能性がすごくあると感じたんです。そのためには昔からこの地域で暮らしている人たちが、今の地域をどう作ってきたかを知ること、絶対作り方を間違えてしまふし、咲くものも咲かないから。

誰もが生きやすい地域をいかに作っていくかですが、なかなか見えないけど、色々な困難を抱える家庭は存在します。それは障害だったり、介護で悩んでいる人もいる。そういう人たちがいるっていうことをまず知ることです。でも社会や地域の中では、そういうことに関わらない方が摩擦は起きないんですよ。結果みんな無難な生き方を選択してしまう。そうやってそれぞれが自分のことだけ考えて生きていたらマジョリテイが中心の社会になつてしまつた。「誰もが生きやすい社会」を本当に実現していくには、多様な人が関わることでのリスクは当然あるという前提を受け止められる地域をどう作っていくか。「みんなが自分とは違う人も受け入れて、どんな人でも全部受け止める」。それを目指しましょうっていう事ではなくて、自分ごと以外にちよつと目を向けられる人たちを地域



で作っていくということの方が現実的かなと思つています。知り始めたから自分でもちよつと知ろうかなつていう人も出てくるし、そしたらそういう人たちに向けて知れる環境とか活動できる環境を作っていく方がいいんじゃないかなと思う。

この活動を通して見えてきたものは、そうですね。最初はこの地域に来た時には古民家で集いをやっていたんですよ。そこでは野菜販売をしたりもしていて、小学生がその仕事を手伝つてくれていたりもしました。その時の子どもが今、一緒にNPO法人で「町のよろず屋」の仕事をしてくれてます。これってすごい面白いことだなと思つていて、卒業して大学生や社会人になつても、その時のことを覚えてくれていて地域と一緒に仕事ができる。「おー久しぶりやなー」って再会出来る。地域で活動が続けていたらこういう光景が見えてくるんだなつて。

田村 幸大

たむら・ゆきひろ

1986年明石市生まれ。関西学院大学社会福祉学科を卒業後、NPO法人くろーばーを設立し、社会教育の普及活動を行う。2014年に鳴尾東地域で住民と共に『NPO法人なごみ』を立ち上げ、共生のまちを目指して活動を行っている。

頼ってた！各店舗メンバーさんの声

いわき

ここが、
はじまりのスクエア



福島県いわき市内郷内町水之出17
ソーシャルスクエアビル 1F
080-3525-9426
ss_iwaki@sdws.jp

いわきスポーツ

コッロ、カラダ、
ツナガリを満たす



福島県いわき市平上荒川字校町1-1
あらたな内
070-3349-6785
ss_sports_iwaki@sdws.jp

西宮

きっかけ生まれる
プラットフォーム



兵庫県西宮市中前田町1-27
ラビットビル 1F・3F
090-8377-4839
ss_nishinomiya@sdws.jp

熊本

一人ひとりの人生を
デザイン



熊本県熊本市中央区水前寺公園3-4
土山天祐堂ビル 2F
070-7587-9202
ss_kumamoto@sdws.jp

自分自身と向き合ってください。クルーさんがいて、自分に合ったストレスコントロールや心理学のカリキュラムなどを受講して勉強になっています。

活動を通して「自分にもできることがあるんだ」と気づけたことは大きいです。自分を認めてくれたり、褒めてくれたりとクルーが一人ひとりと向き合ってくれるので、私にとってはすごく嬉しい経験でした。カフェのような雰囲気落ち着いて活動することができています。カリキュラム全てが自分のためになっているという実感ができています。

スクエアを利用する前、最初は正直不安な気持ちがありましたがリラックスできる雰囲気自分で自分を理解して認めてくれるクルーさんが居ることや、自分に合ったカリキュラムやペースで活動できるのですごくオススメです。

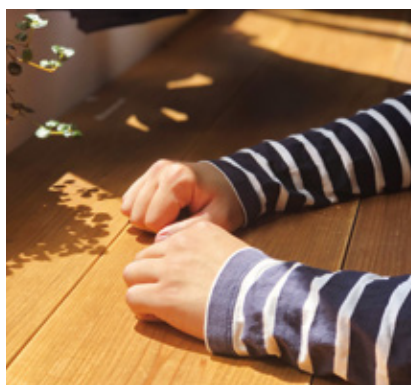
Starryさん・20代・適応障害



人を信頼するのは難しい。常に自分に固定概念としてあつた考え方ですが、同時にスクエアの卒業までに覆された概念でもあります。カリキュラムには自己肯定感ワーク、認知行動療法といったものがあります。物事の捉え方を変えるという趣旨の講義内容ですが、意識的には出来ていなかった、私にとっては目から鱗が落ちる思いでした。それ以外でも様々な経歴を持つメンバーさん方との交流、自分自身との向き合いを支えてくださるクルーの皆様方との面談。スクエア利用前には理解されなかつたと思ひ込んでいたことは理解できるようになりました。

数年をかけて真剣に受講で知識を得たりながら、裏表のない人の温かさに触れたことで変化が生じたように感じます。心の傷が塞がり、かさぶたになつて、目立たなくなつたり前へ進む意欲がわく、叶わなかつたと思ひ出ることが出来ました。

清水さん・30代・不安障害



SOCIAL SQUAREに我所してから2年が経ちました。私にとってこの場所は、たくさんの方が学べる場所です。そして同様に、福祉の印象を大きく変えた場でもあります。

社会から隔離され、閉ざされているというイメージとは正反対に大きな窓の設置などにより、思ひしくない開放的な空間が作り出されていました。そして一番魅力を感じたのはプログラムの充実で、ひとりひとりの発言できる機会が増えることで、自分には進んで意見を言うなど、今まで苦手だと思ひだした事が出来ることは自信に繋がりました。

ODさん・20代・非公開



生活リズムが整い朝から日光を浴びて、健康的に通所できるようになりました。それに伴い心も安定しており、何か相談事があれば自らクルーに相談できるので帰る際はスッキリできています。

カリキュラムも毎週色々な種類があり、工作系に参加した時は、意外と自分って物作りが好きだったんだと発見があり良い刺激になつています。

今まではコミュニケーションを図るためにサークルなどに参加していましたがどれもしつくりくるものではなく、SOCIAL SQUAREではカリキュラムを通してメンバーさんとコミュニケーションを自然と図れる環境がしつくりできており、フリータイムでは活動内容を自分で選択するという仕組みが面白いポイントかなと思ひています。メンバーさん、クルーの方々と距離感も程よく、人間関係で負担なく過ごせています。

Keiちゃん・30代・非公開



編集後記

今回の特集では、福祉を気軽に使ってもらうようにする為に、様々な角度から検証を行いました。全体を通して感じたことは、「シェア」することの大切さでした。自分の得意なこと困りごと、今の自分の枠を超えて少しだけ外に出してみる。周囲の人に気づいてもらえると、それまでとは違った変化が出てくるのかなと思ひました。私たちも、どんどん「ごちゃまぜ」に外の世界に飛び出していきたいと思ひます。

編集 | 藤木泰寛

GOCHAMAZE times 2021 秋号

発行日 | 2021年9月20日

発行人 | 北山 剛

編集 | 小松 理虔(ヘキレキ舎)、藤木 泰寛

デザイン | 江藤 菜穂子

撮影 | 今泉 俊昭、奥田 峻史

企画 | 奥田 峻史、大森 亮平

広報 PR | 渡辺 香

発行 | 特定非営利活動法人

ソーシャルデザインワークス

印刷 | 株式会社東海共同印刷